

佐伯史談

第一〇七号

『郷土史研究誌』
通算一二九号

昭和五十一年十一月十七日発行

法伯史談会

事務局 佐賀市大字稻垣字龍護寺 羽柴方

論説

西南の役豊日国境戦の特性

竹・慈藏地蔵山

北部九州郷土部戦史資料保存会編「兵旅の戦い」より

執筆者 梶 浦 照 秀

豊日之界 賊徒瀧隈々 官軍、防戦 雷撃電撃
 敵王之慌 争ッテ鮮血ヲ踏ミ 死ヲ視ルト帰スルガ如ク
 何ソ其ノ壯烈 湖ニ懸シ罔ノ谷 爰ニ忠骨ヲ埋ム 生魂ニ救
 瀧予滅セズ (原稿文)

古の漢詩は、佐伯士族出身の秋月新太郎が西南の役時、豊後(大分県)日向(宮崎県)地区で戦没した官軍の將兵を、明治十九年五月佐伯市岡、谷招魂所に合祀した際奉じた碑文である。

今日、西南の役を語れば、官軍西軍が死闘を交えた田原坂戦を高唱し、また熊本城包囲が解かれた後の戦闘、とりわけ薩軍人吉撤退後の諸戦闘は大勢が決定したためか、あるいは資料不足のためか、巷間の圖書は多くの戦歎をささいに交いのが普通である。しかしながら右の漢詩が示すように、豊日の山野に展開された戦闘も、決して

て田原坂一帯の戦いに劣りはしなかつたのである。豊日の山野をまず地形的に概観しても、いわゆる九州の山岳地帯に劣らざり、標高五百以上の建峰が重畳として連なり、山險しく聳え、河川は地と穿って峻谷・断崖をつくり、現在も車両で走行するには人家は稀で、道路も幹線を除けば西南の役時とほとんど変わらない状況を示している。

このような地域的特性は戦状的には山地戦・渡河戦を要求される。劣勢の立場に置かれ、砲銃火力に劣る薩軍が特長たる白兵戦闘力で官軍と戦うに有利であったことは容易に想像できることである。

仮に一山頂の陣地を官軍に奪取されても、翌日夜襲をもって奪回することが容易であり、視界が制限される地貌は郷土出身士族で固める薩軍側が、指揮官の

本号の主な内容

- 論説 西南の役豊日国境戦の特性……………一
- 『兵旅の戦い』より(梶浦照秀)……………二
- 誓 西南の役百周年記念行事……………三
- 新説 秋月橋頭と官軍砲撃(大隈木郎)……………七
- 遺書 本陣佐伯氏の家族(佐脇實)……………七
- 記録 佐伯水攻のおもかげ(青木英彦)……………九
- 研究 堅田街道に散る石幢(宮田喜市)……………二
- 遺書 下浦旅日記(一)……………二〇
- 永水津湾(御手洗一西)……………二〇
- 研究 あがふるさと元田誌……………二五
- 二十四日の戦役(市野謙仁)……………二五
- 史料 下直原村年代(曾宮衛吉)……………三
- 遺書 清州佐伯村古本(天野徳次)……………五
- 豊後佐伯の御共展……………五
- 小宮佐伯の御共展……………五
- 史談会 行状活劇、その他……………五

判断に基づく指揮によらねば、集團戰鬥力を發揮できない
官軍側より利のあることと推考され得る。

左、兵站補給については、補給路線の延長に欠陥はあ
るにしても、海軍力等が強力であつた官軍側は一日の長
があつたことはいふまでもない事実であり、陸軍側は不利な
態勢にならねばなるほど、補給の線と点獲得の戦いを展開
せざるを得なかつたのである。

また気候的には戦闘期間が五月中旬から八月中旬にか
け、いわゆる梅雨期を含み、しばしば豪雨に及まわれ、
雨水は山野に満ちて激流の河川は交通を寸断、各所に孤
立する様相を呈し、さらに一度晴天となれば、日中は草
木もよよとも動かぬ山間の酷暑と化し、必然的に行動は
官軍兩軍とも夜間行動・夜襲を強要せられたことと、
戦闘の惨烈化に相乗をかけることになつたのである。

加えるに官軍兩軍とも、開戦当初の部隊建制はくすね
薩軍は中津隊・竹田報國隊・宮將飲肥隊等が参加、官軍
側も鐵線の拡大と戦場が地域に分散独立する様相、及び
熊本城解放までの人員の損耗、なかんずく將校の戦死も
あつて、大隊単位程度の独立支隊として行動せざるを得
なかつた。部隊も東北・関東士族から、新徴募の警察隊
(警視隊)、その他山口士族の別動遊撃中隊、あるいは
豊津士族編成の警備隊(三個小隊、また元來、豊後方面
の官軍攻撃担任部隊は熊本鎮台(谷干城)少將指揮の歩兵
第十三、十四連隊)が主力であつたが、前記の士族徴募
隊に加えて近衛第一連隊、名古屋歩兵第六連隊、姫路歩
兵第十連隊等が配置されて、指揮統一困難であつたと
推察されるのである。豊後方面の戦闘の激烈さが割りに
喧伝されない理由は、実はこの辺に隠されているのでは
あるまいか。

以上豊日戦の特性を簡単に述べたが、以下主として「

熊本鎮台戦闘日記」第三卷の資料により、戦闘経過を歩
兵第十四連隊を骨幹として述べることにする。ただし資
料不足から部隊等の行動に理解できない点があることを
お断りする。

(付) 悲戦 蛇葛山

その後、重岡方面、黒沢方面も逐次戦線は進展して延
岡に向かつて南下した。二十八日、陸地峠決死隊、歩兵
第十四連隊第一大隊第一中隊(十名)、同第二中隊(九名)、
同連隊第三大隊第一中隊(八名)、同第二中隊(二十名)、同
第三中隊(九名)、同第四中隊(十一名)合計六十七名に対
し賞金が下賜され、二十九日歩兵第十四連隊長巽少佐は、
新たに陸地峠から右翼大原に至る部隊の指揮官を命ぜら
れた。だがこのころ熊本鎮台の右翼三田井の隣接第一旅
団から兵力増援依頼と、木浦鉦山方向に対する鎮台兵力
の派遣要請があり、このため谷長官は野津大佐及び前線
指揮官とも会議したため、八月五日まで一時期作戦は停
頓した。

八月六日、休養をへた歩兵第十四連隊主力大原口攻撃
部隊は柚の内を攻撃目標とし、次の三隊をもつて並進し
たが、悲劇は右翼大原越部隊に起きた。

目 標	部	指 揮 官
右翼 藤茂山	第十四連隊の二中隊	第十四連隊長 巽 少佐
中央 陸地峠	第十四連隊第三大隊の二中隊	第十四連隊長 巽 少佐
右翼 大原越	第十四連隊第一大隊第四中隊	第十四連隊長 巽 少佐
(由) 第十四連隊第一大隊第三中隊	第十四連隊長 巽 少佐	第十四連隊長 巽 少佐

「前夜暴雨、黒雲天才蔽じ、泥土道ニ満ち進行大ニ遅
緩セリ……」

一時、陸地峠から一路柚の内に向かつて右翼隊は、山
間の小道を遊撃隊第三小隊を先頭に進んだ。俗林蛇葛山

に近づく時護軍の壘を発見、副指揮官警備隊長高田吉岳大尉は、すべに東天が白み始めたため、後続部隊を待つことなく単独で攻撃することに決心した。警備隊としては宗戦の最初である。壘の正面から強攻したが、幾重にも立っている蒺藜・木柵を除きながら進む時発見され、銃弾が降りそそいだ。高田大尉以下士官二名と、下士官兵卒は十三名があつたという間に戦死、負傷者が続出し警備隊第三小隊は壊滅した。

後続の本隊はこの銃声に急ぎよ駆つけ兵力を投入したが、急坂と泥土に足をすべらせて進めない。第四中隊も士官一名、下士官四名の戦死、津下少佐はやくむなく退却を命じた。士官四名、下士官十七名戦死、負傷者四十五名。豊日戦中最大の犠牲を払うことになった。「塚つて兜の緒を締めよ」との諺があるが、経験不足が招いた敗戦であつたといえる。

紹介

兵旅の旅

編集 北部九州師団史料保存会
一 北部九州師団の足跡
執筆 柴清 照 彦 氏
(陸上衛隊第四師団司令部)

柴清氏は先年、堅貞合戦の戦地を、高木会長以下数人の会員と共に歩いたが、さすが鐵術鐵器にくわい、方々、前掲のようにまことに的確に、適切に西南の役を説明してくれました。地富山の悲劇は、死んだ河野と一氏に聞かされた。きつと涙を流して下さるでしょう。

全五巻 その第一巻出版 (明治大正編)

三三〇頁 定価六、七〇円

発行 西日本新聞社

故河野與一編

招魂所墓碑調査書

西南の役百周年を期して

再版したよの

先版の慰霊祭参列の方々に、十二
年振りに再刻・印刷して配ったま
の、成部少々あり、希望者に頒
ちます、お申越下さい。

報告

西南の役百周年記念行事

佐伯招魂所一墓前慰霊祭など実施報告

当日九月二十六日はあいにく雨になつたが、予定の通り
盛大に執行出来た、概要次の通り

招魂所墓碑参拝

小雨ながら参拝会員三十数名の、揮がた線香の煙が広い墓域に流れはじめた頃、幸い会員の龍護寺森本住職の参拝があつたので、これ幸いと一々の墓前読経をお願いする。線香は消ゆることなく、会員も半分けて一基づつおまいりする。軍人百三十四柱、警察官十四柱、合せて百四十八柱の戦没者が、佐伯市臼坪の岡の谷の、この陸軍墓地に、今日いつまでもおだやかに眠っている。正しい呼び方は「佐伯招魂所」である。

雨が降るので手早やかにこゝを終り、五所明神社の方に移動したが、参拝された山田先生未七人から、短歌をいただいた。

西南の役にたおれしものこのふの読祭ながるる
秋雨の中

曼珠沙華咲く岡の谷ますらおの小ヤキ墓石を
香煙は流るる

百周年慰霊祭

場所五所明神社の拝殿である。齋主は五所明神社の橋佐古若宮司、祭壇がととのい修祓・祝詞奏上、心なしか祭の外感録ふかいものがあつた。明治の新政に對する反撥が、思いがけないほどの動乱となり、不幸その犠牲